

1) 琉球・沖縄の染織資料に関する調査研究

宮城奈々¹

キーワード：黒朝衣 色材科学調査 染織技術調査 天然染料 繊維分析 文化財保存 技術継承

1. 調査研究目的

本研究は、当財団が所蔵する琉球王国時代の染織品の価値を深め、その魅力を発信するため、琉球王国が海外交易および国内の亜熱帯環境で得た色材や糸等を原材料として製作された染織作品について、科学調査および目視による技術調査を継続的に実施することを目的とする。

また、本調査研究で得られた成果を教育普及や外部からの調査依頼に活用し、首里城関連事業における調査研究の充実および人材育成に資することを目標とする。あわせて、繊維・染料等の素材分析に加え、形態・技法・文化的背景を含めた総合的理解の深化を図る。

2. 黒朝衣の繊維・染料に関する共同研究

1) 「黒朝衣」の糸作りおよび製織技術について

(1) 実施体制

当財団所蔵黒朝衣の復元に向け、佐賀大学および東京文化財研究所との共同研究体制を構築し、製作者と連携して調査を実施した。

(2) 調査内容

本年度は、復元製作に資する基礎データの取得を目的として、以下の調査を実施した。

- ・ ワーキングおよびオンラインミーティングを計4回実施し、調査設計および分析方針を検討した(写真-1)。
- ・ 製作者の畑および作業スペースにて、試験サンプルを作製した(写真-2)。
- ・ 東京文化財研究所にて、原資料から剥離した繊維の断面観察(クロスセクション)を実施した。
- ・ 東京文化財研究所にて、原資料の糊成分の有無について原資料から剥離した繊維を対象にヨウ素デンプン反応試験を実施した。
- ・ 当財団にて、文献調査および関連実物資料調査(画像データ)を行った。
- ・ 当財団にて、原資料の顕微鏡観察および画像データ整理を行った。

(3) 成果

以下の科学調査の結果に基づき、復元製作に向けた知見を得た。

- ・ 繊維の不純物除去処理において、糸は生引き(フレッシュな繊維)または発酵(1週間ほど真水に浸けた繊維)に絞った。
- ・ 原資料の芭蕉糸にはデンプン糊が確認されなかった。

2) 「黒朝衣」の色材および染色技術について

(1) 調査内容

- ・ 佐賀大学の石井美恵氏による染料抽出およびクロマトグラフィー分析を実施した。
- ・ 原資料の顕微鏡観察により染着状態を確認した。

(2) 成果

黒朝衣の染料は天然藍単独によるものであることを解明した。これにより、黒色表現が単一染料による染色技術によって成立していることが確認され、復元製作における科学的根拠を得た。

3. 関連染織資料の調査研究(徳之島資料)

徳之島に伝来する染織資料について、写真資料に基づく調査を実施し、黒朝衣および祭祀関連染織資料の所見を整理した。

1) 黒朝衣に関する所見

当該資料は、『球陽』に記載される服制と整合する制度的衣服であり、「大青」に相当する黒朝衣として用いられた可能性が高い。また、縫製技法および形態の特徴から琉球衣装の系譜に属することが確認され、比較的原形を保持した資料と判断された。さらに、女性礼装としての使用可能性が示唆され、黒朝衣の用途に関する再検討の必要性が示された。

2) 龍文帯・御巾(ミサジ)・衣裳に関する所見

- ・ 龍文帯は久米島資料(喜久村家旧蔵ご拝領帯)との意匠的共通性が認められた。
- ・ 御巾には房が附属する構造が確認された。
- ・ 緋単衣は苧麻製の可能性が高く、近世琉球の宮古・八重山で製作された上布との関連が示された。

3) 課題

徳之島資料は、近世琉球における染織文化の地域的展開および染織技術や意匠の共通性を示す重要な資料群である。当財団所蔵の類

¹琉球文化財研究室

似資料との比較研究をより詳細に進めるため、
今後は実地調査を行う必要がある。

4. 染織資料評価委員会

当財団所蔵染織資料 15 点について、有識者
による評価委員会を実施した（写真-3）。

1) 内容

- ・ 事前に作成した資料 15 点のカルテに基づき、
資料の概要を説明
- ・ 各資料の歴史的・技術的・意匠的価値の検討
- ・ 評価額の算定

2) 成果

資料の文化財的価値および位置づけを専門
的見地から整理し、保存・活用に向けた基礎情
報を整備した

5. 研究基盤整備および人材育成

佐賀大学の石井美恵氏が企画したサイエンスリ
テラシー研修への参加（宮城・幸喜）により、染料・
繊維・織組織に関する科学分析技術を習得し、調査
研究の高度化を図った（写真-4、5）。

6. まとめ

本年度の調査研究では、当財団所蔵の黒朝衣を
対象とした科学調査および関連資料調査を通じて、
琉球王国時代の黒朝衣の製作技術に関する基礎的
知見の蓄積が進んだ。

一方、徳之島資料に伝世する黒朝衣調査により、
関連文献記録を考察することで、黒朝衣の制度的
位置づけおよび用途に関する新たな検討課題が得
られた。

加えて、当財団所蔵染織資料評価委員会の実施
により、資料群の体系的整理が進み、研究成果と保
存・活用との連動が強化された。

今後は復元製作および比較研究を通じて、琉球
王国の染織文化の実態解明をさらに深化させる必
要がある。

7. 外部評価委員のコメント

歴史文化の保全のとして、繊維、染料など素材
に関する科学調査は高く評価する。衣裳としての
形態や縫製、文書記録、民俗学など総合的な観点
から王国の染織文化を捉えられる体制づくりを
望む。そのためにも、現在の分析調査データの積
み重ねは重要である。

受託事業の製作管理業務は、順当である。

産業振興の観点から、再現された技術（渡縫いな
ど）からオリジナル商品の開発も考えられる。

（宮里正子研究顧問）



写真-1 ワーキング会議



写真-2 クロスセクション用のウー引き



写真-3 評価委員会の様子



写真-4 天然染料染色による布のクロマトグラフィー分析



写真-5 染織布の繊維鑑別

¹ 琉球文化財研究室

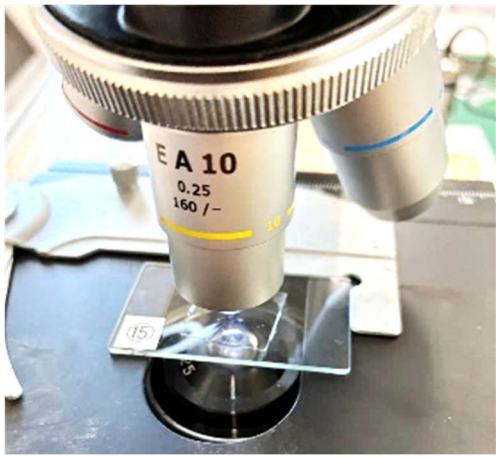


写真-6 繊維の断面を顕微鏡で観察（クロスセクション）

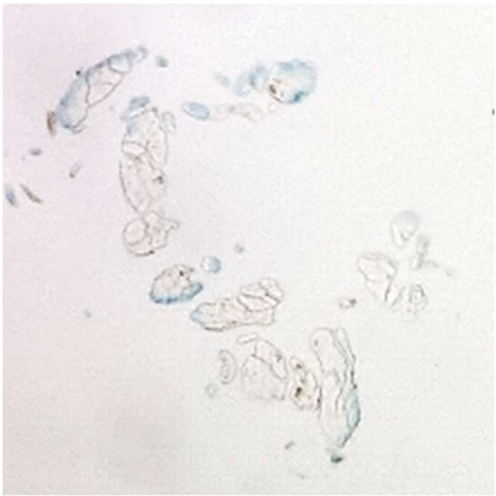


写真-7 繊維断面の画像